

# 千綿っ子だより

ちからを合わせて  
わらい声あふれる  
たのしい学校



## 少年とカエル



ある日のこと、5、6人の子供たちが池のそばで遊んでいましたが、その中の2・3人が、面白半分に池の中へ、石をポンポン投げ始めました。

ところが、池の中には、たくさんのカエルが住んでいたの、子供たちの投げた石にあたって、ひどい怪我をしたカエルが大勢ありました。

とうとう、がまんができなくなって、カエルの中で一番年をとった利口なカエルが、池から頭だけを出して、「みなさん、石を投げるのだけ

はやめてくださいよ」と言いました。

すると、子供たちは、「僕たちは何も悪いことをしていないよ。ただ、石を投げて遊んでいるだけだよ。」と答えました。

しかし、年寄りのカエルは、「それはそうでしょうが、みなさんが遊び半分に投げる石で、私たちはひどい怪我をしています。遊び半分にすることで、他人の命にかかわるような迷惑をかけるなんて、あんまり感心しませんね。」と言いますと、子供たちは、もう言い返す言葉もなく、みんなこそこそと、向こうのほうへ行ってしまいましたとさ。

12月2日に人権集会がありました。私も、少し時間をもらいましたので、上記の話を紹介しました。このお話は、「イソップ童話」にある「少年とカエル」というお話です。

僕たちは「遊び半分」でやっている石投げも、カエルにとっては「命にかかわること」。子供たちの暮らしの中にも、このようなことがあるのではないのでしょうか。自分にとっては何でもないこと、単なる遊び半分にやったことが、相手にとってはとてもつらく、「いじめ」になっているということが。

友達とすれ違ったときに、どんとぶつかる。ぶつかった方に、「なぜそんなことをしたの？」と聞くと、「遊びで・・・」と答える。ドッチボールをして遊んでいるとき、いつも同じ人ばかりにボールをぶつける、その人にはボールを絶対回さない。友達がおしゃべりしようと近寄ってきたら、すっとどこかに行ってしまう。「どうしてそんなことをしたの？」と聞くと、「特に理由はありません」「なんとなく」と答える。

「遊びで」やっていいのでしょうか。「冗談で」やっていいのでしょうか。「理由はないけど」、相手が嫌だなど思うことをやっていいのでしょうか。

千綿っ子のみなさんには、カエルの気持ちがわかる人になってほしいと思います。つまり、人の痛みを心に寄せることができる人になってほしいということです。そういう人こそ、本当のやさしさをもつ人、人を大切にする人だと思ふのです。

※当日は、人権擁護委員の皆様から「心のバケツ」というお話もしていただき、人権について理解を深めました。